

# 理事長挨拶

## “理窓会の皆様へ”

～日本の理科大から世界の理科大へ～”

学校法人東京理科大学  
理事長 中根 滋



陽春の候、理窓会の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。大学を取り巻く状況も少子化の影響が大きく、厳しい昨今ではございますが、皆様のご支援をもちまして、この4月も新入生を迎えることができました。希望を持ち、勉学への意欲に満ち溢れた新入生たちの面持ちを見ると、迎える大学側も気の引き締まる思いを致しております。

ところで、世界はグローバル化や情報通信技術の進展に伴い、人・モノ・金・情報やさまざまな文化・価値観が国境を越えて流動化するなど、変化が激しく、先行きが不透明な社会に移行しつつあります。さらには、環境問題、食料・エネルギー問題、民族・宗教紛争など、さまざまな問題に直面しております。また、BRICS諸国など新興国の台頭による国際競争の激化、生産拠点の海外移転による産業空洞化など、わが国を取り巻く経済環境はますます厳しさを増し、わが国の国際的な存在感の低下が懸念されます。

振り返って国内の状況を見ますと、急激な少子化・高齢化に直面し、都市化・過疎化が進行し、地方の衰退・疲弊が進むとともに、世代間・世代内の社会的・経済的格差が拡大、そして価値観やライフスタイルの多様化が進んでおります。また、サービス産業の拡大、国籍を問わない人材採用、成果・能力重視の賃金制度の導入など、かつてのような終身雇用・年功序列といった一律横並びの雇用慣行が変容しつつあり、従来の企業内教育による人材育成機能の低下が懸念されます。就職ミ

スマッチなどの問題を背景として、若年者の失業率・非正規雇用の割合も増加している状況です。

これらの社会情勢をふまえ、本学が日本国内で社会的に高い評価を得ている伝統ある「実力主義」の学風を将来にわたっても継承し、理工系総合大学として、各学部・研究科がそれぞれの特色を活かしつつ、魅力あるグローバルな頭脳循環拠点となり、教育・研究の両分野において国際競争力を持ち、「日本の理科大」から「世界の理科大」となるため、今後、次のような諸施策を学長の強いリーダーシップのもとで実行して行きたいと考えております。

まず、2013年4月には、葛飾キャンパスを稼働させました。理学部第一部から応用物理学科、工学部第一部から建築学科・電気工学科・機械工学科、工学部第二部から建築学科・電気工学科、そして基礎工学部が集まり、先端融合分野を研究する「学園パーク型キャンパス」として開校した葛飾キャンパスですが、充実した研究・教育設備のもと葛飾区とも連携し、近い将来には必ずや大きな実績を上げるものと期待しております。

学内体制については、再任となった藤嶋昭学長と手を携え、3名の副学長体制を整えました。また、女性活躍推進会議を興し、「リケジョ」の力を結集すべく意見を具申いただくこととしております。さらに、社会のグローバル化と歩調を合わせ、大学のグローバル化を目指し、特別顧問として元

マレーシア首相のマハティール氏をお迎えすることを考えております。

大学にとって、学生は「お客様」です。さらに入学した学生にいかなる付加価値を付けて卒業させるかが問われております。一般の社会状況から、学生にはInternational Professionalになるための科学の基礎的知識や社会・産業のニーズを捉えた専門知識のみならず、広く世界でリーダーシップがとれる人材になるための教養を身に付けて欲しいと考えております。そのためには、「教えるのが世界一うまい大学」を目指します。そして、真の実力を持ったもののみを卒業させるという「実力主義」の伝統は守り続けたいと考えております。具体的には、基礎力を重視した教育を実施し、専門分野に偏らず、人文科学や社会科学など幅広い知識を身に付け、論理的思考力や国際性を身に付けさせる教養教育を重視します。また、事前・事後学習に積極的に取り組ませ、大学院進学率も向上させるべく、学位プログラム化を進めることを検討します。そのためには、学科・専攻の枠にとられない「コース制」の導入を検討し、「卒業研究」についても、客観的なアセスメント方法を考えます。また、グローバル化に対応し、実用英語教育を充実させ、TOEIC・TOEFLでスコア目標を定め、在学中にクリアさせることで測ること、卒業論文・修士論文の要旨を英語で作成させることを必須とするなどを考えております。あわせて、海外大学との連携を強化・交流を拡大し、相互に学生・教員の交流を促進します。制度的にも、セメスター制の拡大、クォーター制の導入も視野に入れます。

教えるのは教員です。大学にとって、教員は宝です。同窓の皆様も、「自分はあの先生に教えてもらった」という記憶をお持ちの方が多くと思います。教員においても教育への努力は怠りません。今後はITC教育、反転授業への取り組みを検討・実施したいと考えております。また、FD（ファカルティ・ディベロップメント）は欠かせません。さらに教員には教育のみならず、それぞ

れの専門領域において問題解決のために努力を惜しまない、ノーベル賞を本気で目指す教員であって欲しいと考えています。これからの教育・研究活動の目標は、次の5点にまとめられます。

1. 教員輩出数No.1の大学
2. 就職率No.1の大学
3. 海外企業求人No.1の大学
4. 理系企業トップマネジメント  
Top-5に入る大学
5. 卒業してからも一生つきあえる大学

これらの目標のために、組織体制も整えます。階層ごとに目標・評価・結果責任・権限の委譲を明確にし、経営・執行がlean & speedyに行われ、結果として「あるべき姿」が着実に実現され進歩し続ける大学であろうとします。また、年功序列優先人事を行わず、外国の教育者・研究者が是非就職したいと願う大学でありたいと考えます。

同窓の皆様にとって、本学はどのような大学と写っているのでしょうか。本学は、同窓の皆様が本学を卒業したことを誇りに思う大学でありたいと思っております。同窓の皆様は、本学のことを誇りに思っていられるのでしょうか。誇り得るに足る大学であるために、本学は日々努力し続ける所存です。本学は理窓会の活動を一生懸命支援し、また同窓生は母校と後輩の将来を支援するような関係を築けたら、これに優る喜びはありません。そのため同窓生と大学との絆とすべく、eTUSというメールシステムを導入し、同窓生全員にメールアドレスを付与、相互に情報交換をしていただくツールとしてご利用いただけるように考えております。同窓生20万人の力を結集し、「日本の理科大」から「世界の理科大」へと飛躍すべく同窓生のお力をeTUSに集約、ご利用賜れば幸甚に存じます。

同窓の皆様には、旧倍のご指導、ご鞭撻、ご支援をお願い申し上げます。

末尾ではございますが、皆様のご多幸、ご健勝、ご成功を心よりお祈りいたします。